

## 「コロナ禍」の中でも対策とって、つながりあって 木曽川上下流交流連携を取り組み続けていきます

新型コロナウイルス感染症が始まってから2年近く経過しています。

昨年前半期を思い起こすと、2020年2月3日からのダイヤモンド・プリンセス号での感染（乗客・乗員712人）に始まり、「PCR検査の少ない実態」「37.5度以上の発熱が4日以上続く」を受診の対象とする「マスク不足やアベノマスク配布」「2月末、突然の全国一斉の休校」…。このような中で新型コロナの感染者は拡大し、第1波、第2波、2020年12月から2021年1月と2月にかけて第3波、第4波、そして五輪時期に第5波が発生しました。4回目の緊急事態宣言中のオリンピック開会日である7月28日、国内での新規コロナウイルス陽性者は4,204人でした。それが閉会日の8月8日には14,457人、8月19日に25,156人と爆発的に拡大して行きました。

どうして、このような事態になったのでしょうか。コロナに打ち勝った証としてのオリンピック開催であったのが…。「自宅療養者（放置）」の増大、なぜ臨時施設が作れなかったのか。国産ワクチンは、何故できないのか。病院がひっ迫し、医療崩壊の事態は何故起きたのか。保健所は2000年の初めから今日まで、47都道府県や指定都市、中核都市の保健所は848カ所から469カ所に減らされ、人員も激減してきています。

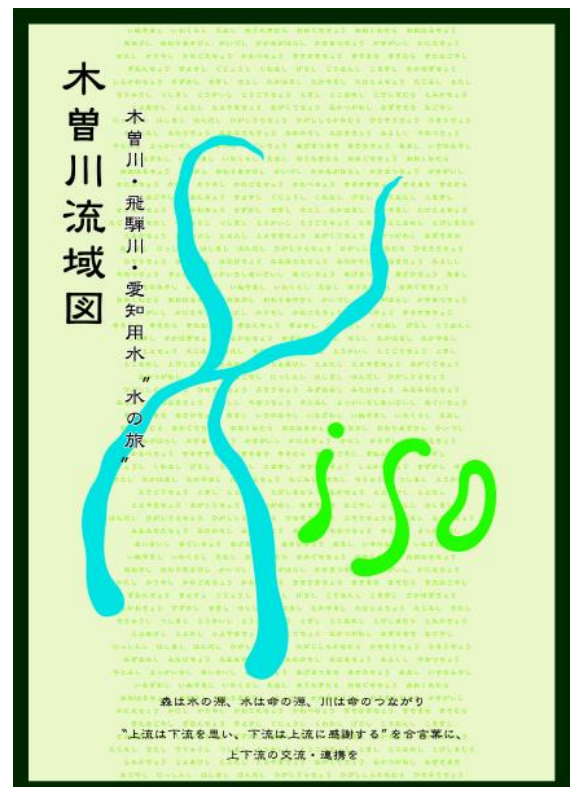
国立感染症研究所の人員や研究費も減少し続けてきてきました。2010年の研究者は325人、2018年306人。予算は2010年で60億近く、2018年40億になってしまっていました。感染症に対応する政策が、そもそも行財政改革の名の下で作ってこなかった現実があります。この教訓を生かしていくには、原因を検証していかなければなりません。

「…だますものだけでは戦争は起こらない。だますものとだまされるものとのが、そろわなければ戦争は起こらない…。戦争の責任もまた（たとえ軽重の差はあるにしても）当然両方にあると考えるほかない…。」（伊丹万作『戦争責任者の問題』1946年8月『映画春秋』）の言葉をかみしめたいと思います。

「コロナ感染症」の関係で、上流域や下流域での様々なイベント、催しが中止になってしまいました。私たちは交流を通して、つながりを創り、連携関係を育んでいながら取り組んできました。出かけていくことや参加できにくい事態が、続いて今日に至っています。しかし、「大きな波」のあとの「谷間」に、コロナ感染症対策を取りながら活動してきました。長野県木祖村での大豆作りは、地元の支えていただいたお陰で昨年も今年も行うことができました。7月末、木曽駒高原にある小池糰店の味噌蔵での「天地返し」作業を行いました。

昨年末は上松町の駅前にできた「KINOTOCO」や木曽川沿いにある工房・作業場を見学しました。また、木育事業を推進する長野県木曽広域連合と名古屋市科学館が主催し、ひのき精香株式会社と上松町地域おこし協力隊が協力して、科学館を会場に取り組んでいる「木曽ひのきからアロマオイルを取り出す」ワークショップに昨年11月、今年7月に参加しました。子どもたちやその保護者、名古屋市の小中学校の先生と交流してきました。

今年の4月17日には、5日に開庁した木曽町の新庁舎の広い軒下を活用した「蔵開き・まちびらき」をテーマに、お酒やお味



噌、甘酒そして酒かすや糶を生かしたパン、クッキーなどの販売が行われている会場を訪問しました。5月3日には、「緑と清流の里」の岐阜県七宗町に行ってきました。毎年恒例の赤池弁財天祭りは昨年到现在に続いてコロナの影響で中止したが、「豆釜匠」（飛水食品）に行きました。

5月22日、みんなの会の第11回総会&木曾川上下流交流・連携の集いを本人出席、ズームでの参加、委任の会員によって、行うことができました。今回の総会開催にあたっての委任状には、「命のある限り、応援していくから」や「継続は力なり」などの励ましが寄せられました。感謝の気持ちでいっぱいです。

“人が上流域に出かけ、上流域のモノが下流域に動き、お互いのココロが動く”関係が積み重なっていく木曾川上下流交流・連携を持続的に取り組みます。今後ともご支援・お力添えをよろしくお願いいたします。（かわさき）

## <大豆作り一大イベント、“殻たたき”完了しました>

今年も11月13、14日に無事大豆の殻たたき作業(写真)を終えることができました。袋詰めした大豆を上松町にて、機械選別していただくため役場に届けてきました。

今年の収量は収穫作業の時にはそれほど分かりませんが、大豆のさやの数がかなり少ない状態で昨年の半分ほどになってしまいました。「みそ豆」が16kg 「すずほまれ」19.5kg 「黒豆」3kg でした。

農薬を使っておきませんので虫食いは仕方ないのですが、かなり被害が大きくなってしまいました。

機械選別で更に三割ほど少なくなることが予想されます。また、ポップコーンの全滅もあり残念で仕方ありません。

大豆の減収の原因として考えられることは、夏の大豆の開花時期とさやの付く時期にひどい長雨と日照不足に見舞われたことです。その時期に木曾郡ではいたるところで土砂崩れが起き、国道19号線の数ヶ所でいまだに交差通行の状態です。お盆のころに木曾川が異常に増水して、木曾町では大きな被害が出ました。

減収の原因について、もう少し分析が必要かも知れませんが、来年の大豆作りに向けて新たな気持ちで取り組んでいきたいと思っています。



今年一年、笹川さんや唐沢さんはじめ「楽作隊」の皆さん、多くの方々の支えで、ひとまずここまでやり遂げられました。皆さんに感謝、感謝です。

今年の「みんなの楽作隊」の主な作業は、5月種まき、6月畑に苗を定植、7月草取りと味噌の天地返し、8月草取りと蕪の種まき、9月稲刈り体験、10月大豆の収穫、11月殻たたきでした。12月には大豆の手選別を行います。

来年5月から始まる大豆づくり・味噌づくりの取り組みに多くの皆さんの参加をお待ちしております。  
\*連絡は楽作隊・近藤（携帯電話：090-4150-6156）まで

## かみむらマルシェ開催、250人が来場！！

～地元の人が地域に合った品物を作り、地元の人が買っていく～



「かみむら」は小池糶店と同経営で、長野県木曾町日義地区の国道19号線沿いにて「靴とブティック」を営む店です。日頃のお客様への感謝と木曾で頑張っている人たちを知ってもらいたいという気持ちから、毎年9月末にマルシェを開催してきました。今年も9月25日(土)に6回目となる「かみむらマルシェ」(写真)が行われました。

コロナの影響もあり、様々なイベントが中止に追い込まれる中、木曾は1年くらい感染者が出ていないこともあり、対策を取った



上で思い切って開催に踏み切りました。当日は天然酵母のパン、オーガニックの焼き菓子、古材を利用した雑貨、木祖村産トウモロコシ粉を練りこんだワッフルや木曽福島で天然素材やオーガニックの品物を取り扱うお店等（もちろん小池糍店も）が出店しました。お天気にも恵まれて 250 名近くのお客様が来場してくださいました。毎年お客様も増えて、すっかり定着したイベントになった感じがしました。

コロナが流行し始めた頃、マスクが足りなくなることがありました。多くを輸入に頼っている現実が生んだ 1つの例だと思えます。食料自給率が 40%を切っている日本。何もしなくても森は青々として緑の草が生える大地があるにもかかわらず、である。温暖化が進んで、あるところでは水害、あるところでは干ばつが起こっている。どの国でも、いつまでも潤沢に作物が育つとは考えにくいのが現状です。マスクと同じことが食料でも…。

“地元の人が地域に合った品物を作り、地元の人が買っていく”

小さな木曽での話ですが、これが本来の姿なのではと、改めて感じた一日でした。（唐沢）

## 安全審査・表示義務なしのゲノム編集食品

ゲノム食品を規制すべきです！私たちは知る権利、選ぶ権利があります！

2020年12月に血圧を下げるとされる「GABA」と呼ばれるアミノ酸を多く含むようにゲノム編集されたトマトが厚生労働省のゲノム編集技術食品の第一号に登録されました。このトマトは2021年になって市場へ流通され始めました。そして10月から立て続けて肉厚の真鯛、高成長のトラフグが追加登録されました。

ゲノム編集とは、狙った遺伝子を壊して変異を起こす、従来の品種改良とも遺伝子組み換えとも違った新しい技術です。品種改良は何年もかかる上、偶然に頼る部分が多いのに対し、ゲノム編集は遺伝子解析によって狙った遺伝子を壊すので確実かつ短期間で成功するなど、希望ある技術としてPRされてきています。しかし危険性も多く孕んだ技術でもあります。その危険性を人々は知らされないまま流通され始めています。

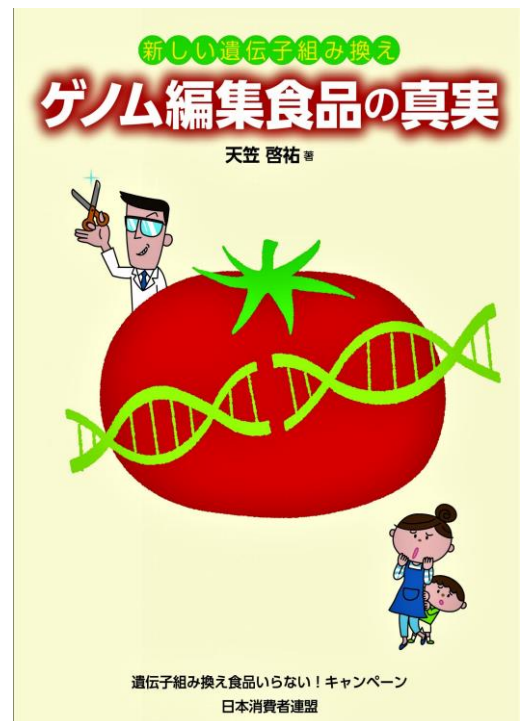
消費者庁は安全性審査をしない、そして表示義務もかけない、としました。理由は主に2つ。①ゲノム編集によるものか従来の品種改良か区別がつかない。②ゲノム編集技術応用食品に係る取引記録等の書類による情報伝達の体制が不十分。日本では調べようとしない、管理もしない、消費者庁への登録も任意という、開発者寄りのガイドラインになっています。EU圏ではゲノム編集食品表示義務をかけています。

ゲノム編集の最大の問題点は今まで自然界になかった遺伝子がばらまかれることです。

ゲノム種の作物を育てれば在来種と交雑します。それを繰り返せば編集種が世界を覆います。喫緊の危険はなくとも、もしも長期間を経て、環境や生態系に重大な影響を与えてしまった時にはもう取り返しがつきません。

そして、このような技術で出来たそれぞれの食品が本当に身体に害がないのか。その検証をしないまま市場へ流通させてしまっているのか。更に登録は任意なので、どこにゲノム編集食品が紛れ込んでいるのか調べることもできません。私たちは食べないように努力することすら難しくなります。

2021年11月現在で厚生労働省へ登録されたのは3件ですが、いずれも「夢のような最高の品種が出来た」といいます。PRするのに最適なケースです。こういった食品をクローズアップすることでゲノム編集への人々の抵抗感を薄くしていく意図が見え隠れします。これから登録もされずに「あらゆる農薬にさらされてもすくすく育つ作物」などが開発されても私たちはそれを知ることすら出来ないのです。起こりうる「想定外の遺伝子の変化」



\* 著者 天笠啓祐 A5判64ページ 定価500円  
購入申し込み：日本消費者連盟又はみん・みんの会へ

を見つけることは極めて困難で、遺伝子操作による「想定外だ」と証明するのも不可能だと指摘されています。私たちは知る権利、選ぶ権利があります。政府はゲノム食品を規制すべきです。

先述のトマト開発業者は、2022年から障がい児介護福祉施設に苗を無償配布、さらには2023年には小学校に苗を無償提供して、子どもたちがこのトマトを育てるようにしていきたい、と言っています。着実に広く認知されるようにコマーシャル戦術に討ってきています。これを阻止したいと署名運動している方たちもいます。ぜひご賛同いただけますようお願いいたします。<https://okseed.jp/news/entry-94.html> (唐沢)

## お薦め本：『生きのびるための流域思考』（岸 由二著、ちくまプリマー新書 2021年7月刊）

この本のはじめに「ここ数年、豪雨の災害が続いています。…大きな一級河川が氾濫し、多大な被害が広がっています。…一過性の現象ではありません。地球規模の気候変動によってこれからも続く、あるいはさらに厳しくなると考えられます。本書は、豪雨や大きな水災害の危機にしっかり備え、未来を生きのびてゆくことができる皆さんの世代を応援するために企画された出版…」と著者は述べています。

2020年7月、国土交通省河川分科会は「流域治水」の必要を打ち出しました。背景にあるのは2014年以降、顕著に起こっている水害、土砂災害の多発があります。集中豪雨によって河川の氾濫や土石流災害などで、大きな被害が出ています。今年7月1日から3日にかけての集中豪雨で、静岡県や神奈川県を中心に大雨が降り、熱海市では土石流災害が発生しました。8月11日から16日にかけて大雨が続き、九州や西日本、木曾川水系において大きな被害が出ました。

流域思考について『「…流域という地形、生態系、流域地図に基づいて工夫すれば、豪雨に対応する治水が分かりやすくなる。さらには、生物多様性保全（自然保護）の見通し、防災・自然保護を超えた暮らしや産業と自然との調整の見通しも良くなる』という、従来からのわたし、そして共に実践を進めてきた市民活動（41年前から続けて、鶴見川流域で行われてきた流域治水）の主張を表現することばとして理解していただければ幸いです」と記載されています。“流域地図を共有しよう”“流域は大地の細胞”“流域思考で生命圏に適応してゆく”…、私たちにあって魅力的、実践的な内容がいっぱいの本です。

私は、この本を手にしながらか、2007年12月24日付朝日新聞に掲載された「手携え『水源の里』再生を」と題する四方八洲男さん（京都府綾部市長）の「水源の里で暮らす人は、下流の人が飲む大切な水源を守り、土石流などの災害をいち早く察知する防災機能を担っている。…」との文章を思い出しました。

「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」上下流の交流・連携を！ (かわさき)

---

## ～物販・水源の里基金に、ご協力をお願いします～

### 木曾青峰高校インテリア科3年生3人、個性あふれる木製おもちゃを制作中

「木曾川流域水源の里基金」は木曾川、飛騨川上流地域の生産品を下流域の人びとが名古屋生活クラブを通じて購入して、その売り上げの2%を基金に積み立てる仕組みです。名古屋生活クラブは、会員販売として安全・安心な自然食品、有機農産物などを行なっている会社です。

私たちは水源の里基金の運用として、木曾青峰高校インテリア科に木製玩具やベンチなどの毎年制作を依頼してきました。現在までに名古屋市科学館には、木曾青峰高校インテリア科の高校生が制作した28の木製玩具が贈呈されています。同館2階にあるウッドィプレイランドで、作品を子どもたちは楽しんでます。

2021年度も木曾青峰高校インテリア科3年の高校生3人が、それぞれ個性あふれる木製のおもちゃを制作しています。2022年の2月下旬か3月上旬に科学館に贈呈することになっています。ワクワクします！（事務局）

## 水源の里を守ろう 木曾川流域みんなの会

連絡先：〒464-0075 名古屋市千種区内山3-7-11 斎藤事務所気付  
TEL 052-745-1001 FAX 052-741-2588 mail: suigenosato@gmail.com